

B型肝炎ウイルス 免疫分子を解明

B型肝炎ウイルス（HBV）が細胞に侵入したのを感じし、免疫を働かせる分子を北海道大の高岡晃教授（自然免疫）、名古屋市立大の田中靖人教授（ウイルス学）らが見つけた。ウイルスが増えるのを抑える働きに関係することも動物実験で確認し、新薬開発に貢献するという。

HBVに対する分子は未解明だった。田中さんらは、肝臓の細胞を使っていくつかの候補分子の遺伝子を一つずつ止める実験をした。RIG-Iという分子を止めると免疫が働かなくなり、この分子がセンサーの役目を果たしていることを発見した。

B型肝炎の治療ではHBVの増殖を抑える薬などが使われるが、ウイルスを完全に排除できず患者は長年薬をのみ続けている。田中さんは「これまでとは違う仕組みの新薬が開発でき、効果を高める可能性がある」と話している。

厚生労働省のB型肝炎創薬実用化研究事業の一環。20日付の米専門誌「イミューニティ」に発表した。

細胞には侵入したウイルスを感知する「センサー分子」という免疫の働きが備わっているが、

この分子がHBVを感知するとウイルスを抑える物質インターフェロンが細胞で作られた。ヒトの肝細胞を移植したマウス

実験などで、RIG-IがHBVの遺伝子の働きを妨げ増殖を抑えることも確かめた。

（編集委員・浅井文和）